文化芸術交流

Arts and Cultural Exchange

美術、音楽、演劇、文学、映画などの芸術から、
食、ファッション等の生活文化にいたるまで、
日本の文化芸術を紹介し、
文化芸術分野のグローバルな交流を
プロデュースし、ネットワークづくりを
支援しています。

文化芸術交流
Arts and Cultural Exchange

日本の文化芸術を世界に広める

海外の人びとが日本の文化芸術に触れることで、日本人が育んできた意識や価値観を理解し、感じる機会を創出する事業を展開しています。造形美術、舞台芸術、映像・文芸、生活文化という4つの領域において、古典芸術や伝統芸能、ポップカルチャーやサブカルチャー、現代芸術などを幅広く展示、公演、出版、映画上映などの形で紹介します。日本の文化を多方面に発信することで、芸術による国際交流の輪を広げています。

情報を提供し、ネットワークを構築する

芸術や文化を通じた国際交流を効果的に進めるためには、互いの国の文化芸術に関する情報の共有や、担い手同士のネットワークの構築が不可欠です。国際交流基金は、舞台芸術、文学、映画などの分野において、日本の最新情報を収集し、ウェブサイトやニュースレターにより海外へ発信しています。また、芸術分野における国際展や見本市など、人や情報が集まる場の創出も行っています。

造形美術

国内外の美術館・博物館などの協力を得て、日本の美術・文化を海外に紹介する大型展覧会や、現代美術、写真、工芸、建築、デザイン、日本人形などのコンパクトな巡回展を世界中で実施しています。国単位での参加が求められる「ヴェネチア・ビエンナーレ」などの国際展での日本代表作家作品の展示、海外で実施される日本美術の展覧会への助成、作家や美術関係者等の人物交流事業など、交流の推進と情報発信に取り組んでいます。

舞台芸術

歌舞伎、文楽、能・狂言、日本舞踊といった古典芸能から邦楽や民謡、またジャズ、クラシック、現代舞踊、現代演劇など、さまざまな日本の舞台芸術を紹介するとともに、国際共同制作も手がけています。また海外公演を行う団体・アーティストへの支援・助成、日本の舞台芸術情報ウェブサイト「performingarts.jp」の運営や、「国際舞台芸術ミーティングin横浜」の開催などの情報発信・人物交流に取り組んでいます。

生活文化

茶道、生け花、武道、食、大道芸など日本人が生活のなかで生み出した文化を、講演やデモンストレーション、ワークショップの形で海外の人びとに紹介し、体験してもらう機会をつくっています。その他、日本の文化を支える優れた知識や技術をもった専門家を海外へ派遣し、文化財保存・修復、スポーツや音楽の実技指導を行うなど、その国の文化振興に貢献しています。

映像・文芸

日本のテレビ番組の海外放映、海外で制作される日本に関するテレビ番組・映画への助成、日本映画祭の開催、国際映画祭における日本映画上映へのサポートなど、映像を通した日本理解の機会をつくります。また、海外の出版社や翻訳者に向けて日本の書籍を紹介する季刊誌『Japanese Book News』を刊行。翻訳・出版への助成や、海外での図書展への参加などを通して、日本文学が海外に広まるための土壌づくりを行っています。

日中交流センター

日本と中国の次代を担う若い世代の交流を促進するため2006年に設立。中国の高校生を約11カ月間日本に招へいし、日本人と同じ学校・家庭生活を送る「中国高校生長期招へい事業」、中国国内で日本の雑誌、漫画、音楽などの最新情報を紹介する「ふれあいの場」、日中両国の若者がブログや掲示板などを通じて参加・交流することのできる「心連心ウェブサイト」の3つの事業を実施しています。

1. フランス・パリのパレ・デ・コングレで開催された「東北民俗芸能と鬼太鼓座&Musicians」公演の黒森神楽の舞台／ 2.「東北民俗芸能と鬼太鼓座&Musicians」公演は米国、フランス、中国の計8都市を巡回した。各公演に先立ち、各地の子ども達を対象に竹楽器づくりのワークショップを行い、子ども達も共演者として舞台に参加した。写真はロサンゼルスでのワークショップ 撮影：岡田信行／ 3. 中国公演に登場した臼澤獅子踊／ 4. 米国公演（国連総会議場における公演を含む）に出演した湧水神楽／ 5. パリ日本文化会館での建築展「3.11—東日本大震災の直後、建築家はどう対応したか」。避難所での緊急対応から本格的復興計画まで、震災直後から1年間に建築家たちが取り組んだ50以上のプロジェクトを紹介した／ 6. 中国で行われた学習院大学教授の赤坂憲雄氏による「震災と東北、そして文化」講演会／ 7. 世界86カ国138都市で、震災にまつわるドキュメンタリー、東北を舞台にした劇映画、震災や自然災害をモチーフとした劇映画などのDVD上映会を行った。写真はニューヨーク・ジャパン・ソサエティでの上映会のようす 撮影：Jonathan Slaff

日本の美術・文化を海外に紹介する大型展覧会を世界各地で実施

■北斎展

ドイツ・ベルリンで日独交流150周年を記念し、葛飾北斎の展覧会を、墨田区、日本経済新聞社との共催で開催しました。「冨嶽三十六景 神奈川沖浪裏」などの名作で知られる北斎の生誕の地である墨田区の所蔵コレクションや、「北斎漫画」シリーズなどの版本、肉筆画、版画、摺物に、ベルリン東洋美術館のコレクション等を加えた約440点の作品で構成し、印象派にも影響を与えた北斎の約70年におよぶ創作活動の全容を紹介しました。ドイツ連邦大統領の臨席のもとで行なわれたオープニングは、出席者の行列が美術館の外にまで続くほどの盛況振りでした。会期中の総観客数は9万人を超え、好評のため、会期が当初の予定より1週間延長されるなど、欧州における北斎人気が伺えるものとなりました。

会期中には関連企画として、監修者、永田生慈氏の講演会やアダチ伝統木版画技術保存財団の版画刷師実演も行なわれ、数多くの観客がその技術に熱心に見入っていました。

[Martin-Gropius-Bau（ベルリン） 2011年8月26日～10月31日]

■田中敦子 ── アート・オブ・コネクティング

戦後日本の前衛美術グループ「具体」を代表する女性アーティストとして、国内にとどまらず海外でも注目を集めている田中敦子（1932－2005）の欧州初ともいえる本格的な個展を開催しました。

約200個の電球が点滅する代表作「電気服」（1956）をはじめ、絵画やコラージュ、パフォーマンス記録映像など50年にわたる制作活動のなかから厳選された約100点の作品が紹介されました。

英国・バーミンガムを皮切りに、展覧会はスペイン・カステジョン、東京へと巡回し、それぞれの地の観客に大きな関心をもって迎えられるとともに、各地の美術関係者から高い評価を得ました。また、すべての会場で子ども達を中心とした教育プログラムや田中敦子とゆかりのある作家による講演プログラムなどが展開され、近年関心が高まる日本の戦後美術への理解を促し、そのなかでも際立った存在であった田中敦子の先鋭性を改めて照射するまたとない機会となりました。

[アイコン・ギャラリー（英国・バーミンガム） 2011年7月27日～9月11日、カスティジョン現代美術センター（スペイン・バレンシア州）2011年10月7日～12月31日、東京都現代美術館 2012年 2月4日～5月6日]

■呼吸する環礁（アトール）── モルディブ・日本現代美術展

青い海に囲まれたモルディブの美しい珊瑚礁の島々は、世界の人びとを魅了して止みません。しかし、近年の地球温暖化等の影響による海面上昇により、島嶼は水没の危機に直面しています。

この展覧会は、環境とアートをテーマに企画が立ち上がったもので、日本とモルディブのアーティスト8組が、現地に滞在しての制作や、地元の人びととの交流を通してモルディブの現状に向き合い、各自が個性的なアプローチによってテーマに相応しい作品を展示しました。環境問題に対する即効性をアートに求めるものではありませんが、より多くの人びとに地球環境について改めて考えていただくことを願って、開催されたものです。

展覧会は、モルディブの首都マレの国立美術館および隣接する公園を会場に実施され、その後内容を一部変更して、東京でも開催されました。

[モルディブ国立美術館（モルディブ・マレ） 2012年3月20日～4月19日、スパイラルガーデン（東京） 2012年5月24日～6月3日]

[左]「北斎展」会場風景
[中] スペインでの「田中敦子展」教育プログラム実施風景
撮影：Stuart Whipps
[右] モルディブ「モルディブ・日本現代美術展」展示風景写真
撮影：Kenji Morita

音楽や演劇の力で日本と世界をつなぐ

■心を伝える民の謡 大和×沖縄民謡 南米公演

東日本大震災では、民謡の宝庫である東北地方が甚大な被害を受けました。被災地にエールを送ろうと、日本の民謡界を代表する奏者たちによる公演を、2011年9月14日から10月2日にかけて、世界有数の音楽と歌の宝庫である南米4カ国（チリ、アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジル）で行いました。ブラジル以外の3カ国では、各国の代表的ミュージシャンも公演趣旨に賛同して参加。なかでもチリでは、歌による社会運動「ヌエバカンシオン」の流れを汲む人気ミュージシャン5名とのジョイントライブを実施しました。双方の歌の魅力を伝えながら互いの歌でセッションする夢のような公演で、会場には約1,200人が集まりました。チリは控えめな国民性で知られていますが、観客は立ち上がって踊り出すほどの盛り上りでした。チリも2010年の大地震から復興の途上にあります。震災に苦しむ両国が音楽の力でひとつになる様は、まさに国際文化交流を体現する光景でした。

■ひとり人形劇の新作をパレスチナで世界初演

2011年10月10日から20日、ヨルダン川西岸、パレスチナ自治区5都市（ラマッラ、ジェニン、ヘブロン、ナブルス、東エルサレム）で、ひとり人形劇俳優・たいらじょうの人形劇「ふしぎな森のトゥウィンクル！」の世界初演となる公演を行いました。

この作品は、パレスチナ巡回公演のために創作された「言葉のない台詞劇」で、台詞はすべて擬音語です。妖精たちが棲む“ふしぎな森”を舞台に、ひとつの花をめぐり、価値観の違いや論争を乗り越え、平和的な癒しを得るファンタジー作品です。ヘブロンの難民キャンプの親子をはじめ、子どもや学生に、ワークショップや交流プログラムを通して、人形制作・操演という日本の熟練の技を直に伝え、文化を通じた平和構築を試みる事業でした。

周辺国との往来が厳しく制限され、今なお紛争の痕も残るパレスチナで、市民・青少年に対する教育文化活動として企画されたこの公演ですが、会場では、たくさんの子ども達の希望に満ちた元気な声援が聞かれました。

■サウジアラビアの国民祭典で総合的に日本を紹介

サウジアラビアでは宗教的理由により文化活動が大きく制約されているなかで、毎年1回開催される「ジャナドリヤ祭（正式名称：第26回サウジアラビア伝統と文化の国民祭典）」は「唯一無二の文化行事」として国民の高い関心を集めています。2011年4月13日から29日にかけて開催された第26回ジャナドリヤ祭では日本がゲスト国となり、専用パビリオンである「日本館」で官民一体となった日本紹介事業が行われました。国際交流基金では、日本館内での武具の展示や、茶道、華道、日本画のデモンストレーションを、屋外ステージでは石見神楽公演、鬼太鼓座や梅津和時トリオら“Music & Rhythms”による音楽公演、古武道、空手のデモンストレーションなどの総合的な日本文化紹介事業を実施しました。

17日間の会期中、約18万人が日本館を訪れ、12万人が屋外ステージ公演を鑑賞しました。東日本大震災直後の困難を乗り越えて日本が同祭に参加し、大きな成功を収めたことに対して、賞賛と感謝の辞が寄せられました。

[左] 心を伝える民の謡　大和×沖縄民謡・アルゼンチンでの公演
[中] ひとり人形劇俳優・たいらじょうとパレスチナの子ども達
[右] ジャナドリヤ祭の屋外ステージで行われた石見神楽の公演

欧米で日本映画のユニークなプログラムを展開
日本の作家と海外の出版関係者をつなぐ試みも

■活動写真弁士がヨーロッパ4都市を巡回

日本では、無声映画の上映にあわせて活動写真弁士がセリフや情景を語り、楽団が生演奏で音楽を添えるという独特の公演形態が発達しました。この日本独自の「活弁」文化の紹介を目的とし、2本の無声映画、『子宝騒動』（斎藤寅次郎監督／1935年／35分）と『折鶴お千』（溝口健二監督／1935年／96分）を、活動弁士の第一人者である澤登翠（さわとみどり）氏の語り、湯浅ジョウイチ氏（ギター・三味線）、鈴木真紀子氏（フルート）の演奏で、イタリア、フランス、ドイツで上映しました。3カ国での公演に加え、フランスのナントで行われたナント三大陸映画祭にも特別出演しました、12日間の巡回の最終地となったベルリンでは、マツダ映画社の協力により無声映画の上映で由緒あるバビロン映画館で公演が行われました。

これらの公演は、フランスやドイツの新聞で取り上げられるなど反響を呼び、フランスのLe Monde紙には、日本の伝統芸能のなかに連なる「語り」に通じる文化として「Benshi」が大きく紹介されました。公演も各地で好評を博しました。

■米国リンカーンセンターで「日活創立100周年」上映会を実施

日本最古の映画会社・日活は2012年に創立100周年を迎えます。そこで、2011年10月、日活が制作した映画作品の大規模な回顧上映を、米国・ニューヨークのリンカーンセンターで実施しました。日活、東京国立近代美術館フィルムセンター、国際交流基金本部が所蔵するプリントを中心に、戦前の時代劇から、戦後のアクション映画、青春映画、そして現在、世界的に注目されている園子温監督の作品まで、バラエティあふれる37作品が上映されました。回顧上映会のオープニング・ゲストとして、往年の日活を代表するスター、宍戸錠氏も登壇し、華やかな幕明けとなりました。この上映を皮切りに、フランスのナント三大陸映画祭、パリのシネマテーク・フランセーズ（いずれも助成事業）でも同様の特集が組まれ、2012年度も引き続き、海外の国際映画祭や基金の主催イベントへと巡回しています。

■Japanese Book News サロンの実施

国際交流基金では、日本の出版状況や出版物に関する情報を海外の出版社、編集者、翻訳者に向けて発信する英文ニューズレター『Japanese Book News』（JBN）を発行しています。

2011年度は、新たな取り組みとして、JBNで紹介した文芸作品の作家が、日本在住の翻訳者や将来翻訳を志す人達と、作品について語り合う、「Japanese Book News サロン 現代日本作家と語る」を開催しました。

JBNの編集委員である東京大学教授・沼野充義氏を聞き手に、第1回は角田光代氏を迎え、『ツリーハウス』（文藝春秋社刊、JBN No.68　2011 年夏号で紹介）を中心に、また、第2回目は川上弘美氏を招き、『風花』（集英社刊、JBN No.58　2008年冬号で紹介）を中心に、ディスカッションが行われました。2回のサロンで語られた内容は、いずれも国際交流基金のウェブマガジン「をちこち」に掲載されています。

［第1回：東京大学山上会館（東京）　2011年9月27日、第2回：国際交流基金本部・JFIC ホールさくら（東京）　2012年1月24日］

［上］米国・ニューヨークのリンカーンセンターでの「日活創立100周年上映会」でファンに囲まれる宍戸錠氏　写真提供：日活株式会社
［右］ベルリンでの活動弁士と演奏による公演

日本から海外へ、海外から日本へ
さまざまな分野の専門家が各地で交流

■綿矢りさ　ドイツ、イタリア講演の旅

2004年、史上最年少の19歳（当時）で『蹴りたい背中』で芥川賞を受賞し、世界各国で作品の翻訳が出版されている若手作家・綿矢りさ氏を2011年9月、ドイツとイタリアへ派遣。ドイツでのベルリン国際文学祭、ハーバー・フロント文学祭（ハンブルク）での講演の他、ケルン、イタリア・ローマの計4都市において、綿矢氏の作品のドイツ語・イタリア語への翻訳を行った翻訳者との対談や、現地の高校生や女優を交えた作品の朗読会を実施し、各地の日本文学愛好者らと交流を深めました。

■若手職人が初挑戦！　和菓子の魅力を東南アジアへ

日本の伝統の味であり芸術ともいわれる和菓子を紹介するために、2012年2月、全国和菓子協会推薦の若手和菓子職人の明神宜之氏、吉橋慶祐氏、小泉直哉氏をタイ・バンコク、マレーシア・クアラルンプール、フィリピン・マニラの3カ国3都市に派遣し、紹介イベントを実施しました。各会場で細やかで美しい伝統の技を披露するとともに、一般市民や料理関係者向けのワークショップも開催。参加者はそれぞれに和菓子の魅力を満喫しました。このイベントは各地の地元メディアでも多数取り上げられ、広く紹介されました。

■欧州・中東・北アフリカ11か国から教員が来日

2011年10月、欧州・中東・北アフリカ11カ国から次世代の若者層に影響力をもつ初等・中等教育課程の教育関係者52名を、約2週間の日程で日本に招へいしました。滞在期間中、参加者は日本文化の体験やセミナー、学校訪問、ホームステイなどのプログラムを通じて日本への理解を深めました。帰国後は、参加者が日本で得た経験・知識を自国において還元することにより、次代を担う青少年の日本理解と国際相互理解が促進されることが期待されます。

■日本画修復の専門家らの招へい研修

日本特有のものとおもわれがちな和紙。実は、世界中で文化財、美術品の修復に利用されています。2011年12月、モンゴル、ルーマニア、ボスニア・ヘルツェゴビナから9人の修復専門家が来日しました。一行は日本伝統文化の精華である京都、伝統的な和紙づくりのふるさと高知、古くから大陸との文化交流の窓であった福岡を巡り、和紙に関する知見を深めました。

■アゼルバイジャン国立美術館所蔵品調査

アゼルバイジャン国立美術館は同国随一の美術館で、東洋美術コレクションを約300点所蔵していますが、日本美術品と中国・アジア美術品の判別が難しいため、展示することができない状況でした。このため、同美術館の要請を受けて、所蔵品調査と調書作成のために秋田市立千秋美術館館長の小松大秀氏と東京文化財研究所主任研究員の江村知子氏のふたりの専門家を派遣しました。その成果は今後の収蔵・展示活動に活用される予定です。

［左］ケルンのカフェでドイツ人小説家マリー・マルティン氏（左）と対話する綿矢りさ氏（右端）　撮影：June Ueno
［中］東南アジア3都市で和菓子の魅力を紹介した3人の若手職人、（左から）吉橋慶祐氏、小泉直哉氏、明神宜之氏
［右］和紙の知識を京都の文化財修理工房で学ぶ海外の修復専門家達

高校生が日本の生活を体験。大学生が中国で交流活動。多角度から“心と心のつながり”をつくる

■中国高校生長期招へい事業

日中交流センターでは、中国の高校生に約 11 カ月間、日本で生活する機会を提供しています。日本の高校に通い、同世代のクラスメートやホストファミリーなど多くの日本人と交流するなかで、日本の社会や文化を実感に基づいて理解してもらう、そうした草の根の交流を通じて、将来の日中関係の礎となる若い世代の信頼関係を構築することが本事業のねらいです。

6 年目を迎える 2011 年度には、前年度から日本に滞在していた第五期生 38 名のうち 29 名が東日本大震災の影響で一時帰国を余儀なくされたものの、そのうち 22 名が再来日を果たし、7 月には 31 名が本来の期間を全うして帰国の途につきました。続いて 8 月末には、第六期生 32 名（男子 8 名、女子 24 名）が来日。2012 年 7 月まで各地で生活しています。

高校生たちは、日々の勉学、クラブ活動、学校行事、ホームステイなどを経験することによって自立心や協調性を身につけます。また、受入校の先生やホストファミリーが、時に優しく、時に厳しく指導し、彼らの成長を後押ししてくれます。こうしたひとつひとつの経験を通じて、将来の日中関係の礎となる若い世代に心と心のつながりが築きあげられていくことが期待されます。

また、2011 年度は、日本側受入校および中国側出身校の教員が互いの教育現場を訪ねあう「日中高校教員相互訪問事業」も実施し、本事業の更なる発展と内容の改善に役立てています。

■「ふれあいの場」の設置・運営

「ふれあいの場」（中国語名：中日交流之窓）は、日本に関する情報が少ない中国の地方都市において、日中の文化を体験できる交流の場です。2010 年までに、四川省成都市、吉林省長春市、江蘇省南京市、吉林省延辺市、青海省西寧市、江蘇省連雲港市、黒龍江省ハルビン市、重慶市、広東省広州市の 9 カ所に開設され、2011 年度は、遼寧省大連市、浙江省杭州市に新設されました。

「ふれあいの場」では日本の雑誌、書籍、DVD 等を通じて現代の日本文化に触れる機会を提供しているほか、多様な日中文化交流イベントも実施しています。2011 年度は、西寧、南京、連雲港などで日本の大学生グループの企画による学生交流事業が実施されたほか、中国に滞在中の日本人学生と現地の中国人学生とでイベントをつくり上げる、「ふれあいの場活性化チーム」（通称「F 活」）の活動も実施しました。また、2011 年度は、東日本大震災の直前まで「中国高校生長期招へい事業」で招へい生を受け入れていただいていた仙台の高校から、仙台の姉妹都市である長春の「ふれあいの場」に、生徒 7 名が訪問し、現地の学生らと交流しました。参加した仙台の高校生からは、被災地への中国からの支援に対して自然と感謝の言葉が述べられ、両国の絆の固さが感じられました。

■「心連心ウェブサイト」運営

日中交流センターが運営する「心連心ウェブサイト」（http://www.chinacenter.jp/）は、日中同時翻訳機能を使って日中の若者たちが日本語・中国語のどちらでもやりとりできるブログ形式のコンテンツを備えています。これらは、国際交流基金のさまざまなプログラムで来日・訪中する学生たちが事業終了後も交流を続ける場としてだけでなく、等身大の両国の若者の姿を紹介することで、未来の日中友好の礎を築くことを目指しています。

[上] 江蘇省の連雲港ふれあいの場で日本の学生がコスプレを披露して交流
[左] 2011 年の夏に来日した中国高校生長期招へい事業の第六期生